
逆行レジスタンス

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆行レジスタンス

【Zコード】

Z0119C

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

母が死ぬ。父はすぐに愛人と再婚する。あの日を取り戻すための、僕のささやかな抵抗は。

「僕達は何処にもいかない」

ライラックが、隣りの庭から芳香を放ち。僕は、息を吐きだした。
「僕なんて、よしなさいよ。今時、男でも使わないわよ」
茶化したように、今井さんが言つ。年上で、美人とは言い難い女
で、父の愛人だ。

「この街で、静かに暮らすんだ」

「そう、相変わらず頑固なのね。あの女に似たのかしら」
今井さんが、あの女という時、それは決まって母の事だ。

「あなたに似なくて良かつたよ」

田は見ない。田を見ると、僕はいつも動悸がして、息ができなくなる。

「可愛くない所が、あたしにそつくりよ。なんてね」
彼女は、立ち上がると何やら用事を思い出したらしく、母のいつ
も座っていた椅子に座ると、誰かに電話し始めた。

最近、猫のブラフが、彼女に慣れはじめたのを見ると、僕が学校
に行つている間も、家に来ているのかもしれない。

僕には、ブラフしかいない。ブラフまで、あの女に取り上げられ
たら、僕は耐えられそうにない。

「新しい家、見に行かないの？」

眉をさつきより吊り上げて、後ろに立つた彼女の声がした。

半分は本当に寝ていて、半分は寝たふりで、無視する。電話の相
手は父だろう。

「見に行つたつてぢづせ……」

「あら、意外ね。あたしと三人で住みたいのかしら？」

「そんなんじやない」

「勝手にすれば、なんならあたしのマンション貸したげよつか？」
の家は、売るつて決まつてゐるの、残念」

確認した訳ではない。でも、父が僕と住みたいと思つはずがない。

「猫は飼えるんですか」

「冗談のつもりだつたらしく、彼女は黙る。

「たぶんね、確かに飼えたはずよ」

憐れみの目で、僕を見る。

「そうですか」

彼女は、少し考えて言つた。

「ねえ、あたしと住むのがそんなに嫌なの？」

「嫌……です」

覗き込まれたせいで、上手く話せない。

「仕方ないわね。お父さんは、説得するつて言つてたわよ」

「いいんです。僕なんか居ない方が本当はいいんです」

頑固なのは母譲り。確かにそうかもしれない。

「あたしは何も言わないから、言つなら自分で言いなさいよ」

「うん」

ライラックは、あと三日もしたら枯れてしまつかもしれない。この家も、すぐに売却が決まる。

ブラフが、僕の手を離れて庭に行こうと窓を搔く。

真つ直ぐに、僕の方を見ている彼女が窓に写つている。

僕は気付かないふりをして、窓を少し開けた。さつきよりも少しだけライラックの香りが濁つたような気がした。

結局は、同じ事だつた。何処にも行けない。この街から逃げても、また他の何かから逃げるだけ。

でも、何から逃げるんだろう。現実から? 今井さんから? 父から? ら?

ブラフは、僕を見ることなく、ひょいと塀に飛び乗つて、視界から消えた。

それからすぐに、ブラフが車に弾かれて死んだ。賢い猫だつた。

老いていたためか、天気が悪かったためかは分からない。

その原因の一端が僕でないと、どうして言えるだろう。

僕の反抗心や惨めな自尊心がブラフを殺したのかもしれない。

それでも僕は止めない。何を？何でも。

思い通りにいかない世の中を、この思い通りにならない手と足と言葉を使って泳ぎ続けなければならない。

僕は、僕だけの為に泣いた。ブラフは僕を救ってはくれない。それが世の中の決まり事なんだ。

頭が理解する前に、僕は庭から飛び出した。

今井さんから鍵を貰おう。母の事やブラフの事なんか考えていない。

考える事を止めないと僕は溺れてしまうから。

片付いた部屋に差した陽気が妙に懐かしいブラフの仕草のようだ柔らかい。

僕は、玄関を出でいく。一度と戻らないだろうと思つたが不思議と前を向いていた。

今井さんのマンションは小綺麗に掃除されていて、黒や灰色、それに観葉植物の緑。不自然なぐらに生活の気配がない。

「これでも片付けたのよ」

そういうた今井さんの家具の趣味は良く。母の奇妙な趣向よりは同意できた。

母はよくキルトや、花柄の小物を飾った。僕や父は口に出しては言わないが、嫌だった。

「ありがとうございます。家賃はいくら位なんですか？」

「学生が払える値段じゃないわ。あなたのお父さんが払ってくれるわよ」

「そうですか……やつぱり今井さんが住んでた時も？」

「ええ、愛人ですもの」

変な言い方だなと思つたが、田が呑つと嫌なので、そのまま黙つていた。

「ペットは飼つてもいいってさ」

「……そうなんですか」

「あの猫、死んだつて？」

「うう、この件を平氣で語るのは今井さんらしい。変に氣を遣われる
よつもすゝと良こ。

「私も結構なついてたんだけど、名前知らなかつたんだよね。
アンタも教えてくれないし、私はチロ助つて呼んでた」

卷之三

やはり手口眼がお似合い

そういうでぐぐぐ第三この女の事が僕には分からなかつた
なんで簡単に笑えるのかも分からぬ。なんで父が母を捨てたの

「Jのマンションには庭がない。JのJから見える自然公園は、公園というよりは森のようだった。

「はい、じゃあ父さんによひしへ

新しい僕の家。そこは愛人を囲う為に父が用意したマンションで、ライラックもブラフも居ないけれど、僕にはぴったりの家かもしない。

「ねえ、余計なお世話かもしれないけど、一緒に住みたか二たら……いつでも言ってね。アンタが思ってるより、私達はアンタが嫌いじゃないのよ」

優しい言葉なんて欲しくない。憐れみなら、止めてくれ。
母が死んだ時も、みんな優しさを振り撒いた。

でも、僕は別に悲しくはなかつた。それなのに、悲しいフリをしろと周りは無言で要我した。

悲しいフリをする度に嘘をついてるなと思った。そっちの方が悲しくなった。

ブラフの居ない朝。窓を開けると少し風が冷たくて、ぼんやりと

これから的事を考えると頭が痛いけど、あの家で鬱屈した日々を

送るよりマシだ。

マンショングループから見えた森は、鳥獣の保護区で、なかなか有名な公園らしい。

気持ちに余裕ができた今は、現実味を帯びる明日からの生活の事でいっぱいだった。

学校のこと、家事のこと、父親のこと。何より僕はまず、猫を飼うことを考えた。

ブラフ以外の猫を想像するのは困難で、感触すら手が覚えている。誰だつて誰かの代わりになんてなれないのだ。例えば、父親は母親には、なれないし。愛人は母親にはなれない。

子供みたいに我儘な僕は、その現実すら受け入れ難く。ただ、時間に逆らつ。あの日を取り戻そつと、ただ必死で時間に逆らつている。

強情なのは母に似ている。可愛くないのは市川さんに似ている。失ったものを取り戻そうとしている僕は父によく似ているのだろうか。そして父が、四日ぶりに会いに来て。僕は、いいよと言つていた。

僕の抵抗はたぶん、ほんのちょっと、もう少しだけ続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0119c/>

逆行レジスタンス

2010年10月8日15時12分発行